

最近の社会問題は多岐にわたってあるが、高齢の私にとっては生きづらさを感じる日常が増えてきたように思える。

身近なことでは、スマホを使いこなさなければ、生きられない世の中になりつつあることである。何の不自由も感じていない生活が、無理やり変えさせられていくことに大きなストレスを感じている。デジタル化か何かは分からないが、年寄りには大迷惑なことである。

確かに携帯電話の便利さは、有効であるとは思ってはいるが、電話を「かける、うける」の機能以上のことは望んではいない。かゆいところに手を届かせようと開発し続ける企業側の思いに行政が、あるいは社会が迎合していく現代には全くお手上げである。

さしあたり、「マイナンバーカード」を作ることを周りから勧められているが、このことが行政にとっても、私たちにとっても、本当に幸せな人生を送る手段となっていくのであろうか。「このカードがないと困ることが多くなるよ」とか脅されてはいるが、こちらはそれ以上に不安なことが多い。生きて行く上においてどうしても必要なものなら「お金あげるから」と、税金を使う必要もないのではないか、そう思うのである。現金でしか物を買わない私にとっては、ポイントも何もカードで物を買わないのだから、一連のえせ近代化とも思える今回の施策は大いに迷惑なことである。つながりや絆の大切さを訴えながら、顔の見えない、会話のない、合理化と利潤だけを追い求める社会では、人間が壊れていくようにしか、私には思えないのである。

菩薩の精神 「上求菩提・下化衆生」

M・M

我が家のお墓の華瓶には、写真のように「上求菩提 下化衆生」の文字が彫り込んであります。これは平成5年にお墓を建てた時、石屋さんに頼んで彫り込んでもらったものです。この「ことば」はお釈迦さまが、人間究極の精神を表す言葉として大切にされたものと思われまます。すなわち、上に向かつては悟りの境地を求め、下に向かつては衆生に悟りをもたらしすというものです。これは大乘の精神を表すものでもあり、上求菩提と下化衆生を別々のものとせず、一体両面とするところに大乘の本質があると言われます。

500代の始めにある書籍を通してこの文言にふれ、深く心にこめてきましたが、年とともに人生の指針として、これに勝るものはなく、真理を衝いた格言であると深く思うようになりました。私は60歳になった時、10年目標を定めて取り組むようになり、60代の目標は「自然観照」でした。自然の様々な現象をつぶさに観察しその意味を考察するというものでした。70歳は「一切他力」、80代は「念仏三昧」で現在に至っております。この先90代まで生きながらえることができたことすれば、「下化衆生」を努力目標にすえたいと、心に決めております。

「上求菩提下化衆生」は、仏教に出会った意義と幸せを、しみじみと感じるものであり、深い慶びと感謝をかみしめ、一層報恩にいそしみたいと念ずるものです。

令和4年度

報恩講のご案内

十二月十一日(日)

日程 (コロナ感染状況によって変更の場合がございます。)

午前 10時～	勤行
〃 10時45分～	法話 S・K師
午後 1時～	勤行
〃 1時40分～	門徒総会
〃 2時30分～	後かたづけ

お齋は、お弁当をお持ち帰りいただきます。お茶は用意しております。

おみがき

…十二月五日(月)

9時より 多くの方のご協力お願いします。



平成二十三年には宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌が勤まり、同年には光受寺改修工事が始まり、光受寺の御遠忌も二十五年の四月にお勤めすることができました。あれからも十年ほどの月日が流れてしまいました。

そして来年春には、親鸞聖人御生誕八百五十年、立教開宗八百年の時を迎えます。それに先立つて去る十月十六日(日)には、岐阜別院において岐阜高山教区の「お待ち受法要」が勤まりました。光受寺からは住職と坊守が参加してまいりました。

テーマ 「南無阿弥陀仏 人と生まれたことの意味をたずねていこう」

大谷 裕(真宗大谷派新門)のご挨拶をいただき、記念講演講師として真宗大谷派僧侶であり、姫路医療センター小児科医長である梶原 敬一師に「浄土の真宗は証道いまさかりなり」という講題でお話をいただき、次のようなメッセージをいただきます。

「コロナ、異常気象、戦争と次々と起こっている問題は、私たち一人一人の生活ではなく、社会全体の問題として全人類に突き付けられています。科学や技術といった方法はこれを解決していかないと誰かが気づき始めています。それでも私たちは、何よりも未来の衆生のためにこの状況を超えていく道を見つけなければなりません。

親鸞聖人はその道を証道と明らかにされています。そして、現代社会の中にその道への門を開いていこうとを、私たちに託されたのではなからうかと思えます」。

今月の掲示板

他力とは

私が自力でしか

生きていないことを

私に知らせる

力のこころである

俺が、俺が、で生きてきた自分の人生。

多少の苦労はあったものの、まずまず自分の思い通りに生きていくことができた。よく頑張ってきたものだ、今までの人生を振り返る。

しかし、老いた今、愚かにも老、病、死を自力で超えることはできないと改めて知らされてきた。細やかないちいちの日常が輝いて見えてくる。多くの「おかげさま」をいただいで生きてきて、今も生きている。老いや、病が私の眼を少し開かせてくれたのかもしれない。

南無阿弥陀仏

新コーナー

十二回連載

樹林

宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年立教開宗協賛テーマ
南無阿弥陀仏 人と生まれたことの意味をたずねていこう

— 問いつける歩みをとこに —



8回目

こころの散歩

信じる宗教・感じる宗教 樹林
私は平成九年と十年の2回、モンゴルの砂漠へ植林活動に出かけましたが、砂丘のつながりが果てしなく続く風景からは、広大さの他に感じるものはなく、環境の厳しさだけが印象に残りました。日中は強烈な日光が照りつけ、気温45度に達します。ただ湿度が低いのでそれほど暑さは感じませんでした。日本の豊かな環境からすると、砂漠は生き物を寄せ付けない正反対の厳しさでした。

こうして宗教も「信じる宗教」と「感じる宗教」といった、二つの性格をもった宗教が生まれるように思えます。砂漠では太陽の運行以外に頼るものなく、天の神を信じる宗教が誕生したものと思われまます。まさに信じる宗教です。こうして砂漠の宗教は、一神教が栄えました。

これに対し、緑豊かな地域では、自然の豊かな慈悲につつまれ、自然への感謝の念から感じる宗教が育ちました。神道では多神教となり、仏教も多様な仏様が登場しました。



光受寺御遠忌法要

光受寺学習会 (本年最終) 十一日(土) 六時半～八時
金曜茶話会 毎週金曜日 午後一時～三時まで